

帰国後技能実習生のフォローアップ・アフターケア等に関する取組好事例

外国人技能実習機構

三重県 A 監理団体

【実習生の国籍】ベトナム、中国、インドネシア、タイ、モンゴル
【実習生の職種】農業、機械・金属製品製造、ビルクリーニング

【ポイント】 ✓修得技能等を活かして母国で活躍
✓帰国後の継続的な交流、送出サポート

日本で修得した技能を活用して野菜栽培

モンゴルの
キャベツ畑



写真①

モンゴルの
ジャガイモ畑



写真②

修得した技能を活かした帰国後の開拓と営農

モンゴルでは肉食主体のため、政府が菜食を推奨しているが、野菜のほとんどを中国、韓国、ロシアから輸入しているため、高価なものとなっている。そのため、政府は自国で野菜栽培を行うことを奨励している。

傘下の実習実施者で受け入れた実習生は、モンゴルでも栽培が可能なキャベツ、ジャガイモ等の露地野菜の栽培技能を修得し、帰国後は、5ヘクタールの土地を所有し、キャベツとジャガイモの栽培を行っている(写真①、②)。

モンゴルでは、冬期は寒さが厳しく野菜が育たないため、夏期のみでの栽培に限られるが、2、3年ほどかけて土地を開拓し、現在は安定的な収穫を得ている。

日本とモンゴルの架け橋となるために

元実習生は、冬期の間は技能実習の送出機関の事務所で働いており、技能実習を通じ日本とモンゴルの架け橋的な存在になりたいという思いで、実習生送り出しのサポートを行ったり、技能実習希望者の相談に乗っている。

SNSを通じた実習後の交流

モンゴルへの帰国前に、監理団体職員と実習生の間でSNSのアドレスを交換し、連絡を取り合っている。元実習生から監理団体担当者に「実習場所(畑)の現在の様子を見せて。」といったリクエストがあったり、帰国後の連絡では聞き足りなかった技術を学ぶために短期間再来日する元実習生もいる。

帰国後技能実習生のフォローアップ・アフターケア等に関する取組好事例

外国人技能実習機構

京都府 B監理団体

【実習生の国籍】インドネシア
【実習生の職種】耕種農業、建築板金、型枠施工、とび、建設機械施工、パン製造、そう菜製造業、塗装等

【ポイント】 ✓技能実習で修得した知識や技術を母国に持ち帰り、
現地の農業発展に貢献

元実習生が母国で農業協同組織を設立

監理団体では2014年からインドネシア人実習生を受入れ、野菜の耕種農業実習を行っている。実習修了後、帰国した元実習生たちは日本の農業協同組合のような組織をつくり、畑を購入して自分たちで野菜栽培を始めた。この組織からは毎年100名以上のインドネシア人実習生が来日している。実習生たちは給与の一部をこの協同組織に送金し、貯まった資金で少しずつ畑を拡充しており、現在は2ヘクタール以上の畑を所有している。栽培している作物は白菜、小松菜、スイカ、ナス、キャベツなど多岐にわたる。

マルチシートの技術を母国で活用

2019年に来日した実習生たちは、実習で学んだマルチシート（農業用ビニールシートで畑の畝に苗を植えた後、畝の上に被せるシート）の技術を母国に持ち帰った（写真①）。このマルチシートを被せることで、内部の温度が上昇し湿気がたまるため、土の乾燥を防ぎ、水やりの作業を省くことができる。また、雑草対策にもなるので作物の成長を促進させる。このマルチシートのようなものはインドネシアでは販売されていないため、実習生たちは監理団体が提供したサンプルを持ち帰り、現地の工場で製造してもらった。他にも実習で修得した日本の農作業技術を母国での野菜栽培に活用して、生産性を大きく向上させている（写真②③）。

写真①



マルチシートを活用

写真②



直射日光を避けるためネットを設置

写真③



畝を真っ直ぐに作るため、紐を使用